

第 17 回日本在宅医学会もりおか大会 一般・指定演題

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	肺炎後に廃用症候群を合併し、その後急速に進行した摂食嚥下障害を呈した若年精神発達遅滞患者の 1 例
演者名	松尾 兼幸 1)、佐藤 俊哉 2)、多田 則道 2)、高橋 累 2)
所属	1) 松尾けんこうクリニック、2) 内科佐藤病院

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究	NO.
	4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	1
目的：肺炎後に廃用症候群を発症し、その後急速に進行した摂食嚥下障害を呈した若年精神発達遅滞患者の経過について報告する。 方法及び結果：症例は 31 歳、男性である。 主訴：摂食嚥下障害。 家族歴：精神発達遅滞（弟） 現病歴：てんかん発作を伴う精神発達遅滞にて精神科通院中、発熱等を主訴に他院を受診した。その後症状の改善がなく、平成 25 年 1 月、肺炎の診断にて他院呼吸器内科入院治療となった。入院中に症状、胸部所見などは改善し、再度精神科に転入院となり同年 3 月退院となった。そして、退院後は施設入所となり、当院にて施設訪問での経過観察となった。退院直後から著明な運動量の低下と摂食嚥下障害が進行し、食事摂取量の減少に加え、誤嚥に伴う呼吸器症状を度々呈するようになった。平成 25 年 11 月及び平成 26 年 2 月には誤嚥性肺炎にて再度入院治療を受けた。平成 26 年 7 月には、摂食嚥下障害に対するリハビリテーション目的にて入院治療を受けたが十分な効果はなく、最終的に胃瘻造設の方針となった。胃瘻造設前検査である腹部 CT 検査にて少量の腹水が認められたため、胃瘻造設を延期し、中心静脈による高カロリー輸液療法を開始し、全身状態の改善を待って、同年 9 月に胃瘻を造設した。。しかし、胃瘻造設後も全身状態の改善がなく永眠された。 考察：肺炎後の廃用症候群に伴う急速進行性の摂食嚥下障害症例を経験した。背景には、てんかんや精神発達遅滞が認められる若年患者ではあるが、経過中の検査では、明らかな脳血管障害の合併や脳萎縮の進行などは認められなかった。今回の症例より肺炎発症後には、若年患者でも急速進行性の摂食嚥下障害を伴う廃用症候群を合併することがあるため、早期の離床や摂食嚥下訓練の実施に加え、全身状態を考慮した栄養管理計画を速やかに検討する必要がある。		